

立命電友会

松田先生追悼

松田長生先生を偲んで



本学名誉教授松田長生先生が昨年十一月二十九日、八十三歳の天寿を全うされた。ご本人のご意志により家族葬であったため、後日、先生にご厚誼をいただいた電気教室の者が集まってご自宅に伺い、お別れさせていただいた。

先生は、一九四五年京都帝国大学理学部ご卒業後、京都大学工学研究所文部教官、大阪府立大学教員を経て、一九六四年に本学に着任されている。定年によるご退職

が一九八七年であるから、二十数年間を電気工学教室の教授として教育研究に携わってこられた。

先生のご専門は照明工学の分野であり、京都大学工学研究所時代は照明学会の大御所であった大谷泰之教授のもとで、のちに摂南大学工学部教授となられた野口透先生らと共に太陽放射照度の観測・分析に当たられ多くの成果を発表されている。その成果のいくつかは、電気学会大学講座「照明工学」の中でも引用され、今日の太陽光発電・太陽光利用技術の開発にも役立っている。本学に着任後は、照明工学、電動力応用、電気材料等の講義を担当されていたが、その間に直接指導された卒研究生・院生の数も二百名を超えている。

役職の上でも、二部協議員、学科主任、就職委員等を歴任され、

個人的な相談、就職の面倒をよくみられていた。また、内外からの学位論文の審査については先生が理学部出身であったのでご専門の照明関係の主旨はもとより、他学科関係の学位論文の副査としても多く関係された。その数、十数件に及んでいる。

先生が本学に着任されるまでは、照明工学に関する研究設備は皆無に等しかったから、基本設備の計画から購入実施にいたるすべてを、一人で進めなければならなかった。ご苦労は相当のものであったろうと推察できる。当時、電気工学科の基本棟は旧・四号館（現・有心館）であったが、一九六五年に一号館が完成するまでは四階の半分を機械工学科教員の個室として使用されていたため、先生が着任された当時は教員に割り当てられる面積は個室二部屋程度が限度であり、大きな設備をおくことなど不可能であった。機械工学科が移転した後のスペースに、初めて照明工学関連の研究設備が置かれることになったのである。その頃、所用で先生を訪ねると、学生と共に球形光束形の調整などを楽しげにされていた姿が今も目に浮かぶ。先生は大変温厚で、この文を纏めるにあたって、松田研出身の何人かに聞いてみたが、どの年度の卒業生も先生の声を荒げての叱責は

記憶にないとのこと、物静かであるが、この交渉の窓口となられたのが、副主任であった松田教授であった。当時の様子は今でも鮮明に思い出される。先生が二階の会議室で昼食をとられてみると、決まって学生からの会議設定を要求する電話が掛かってくるのである。先生、悠揚迫らず弁当を使いながら、常変わらぬ口調で丁寧に対応されるのであるが、学生の無理な要求には決して応じようとはされなかった。ついにしびれを切らした学生十数名が、会議室へ押しかけて来るのであるが、結局、何ら言質をとることなく引き上げるのが常であった。

紛争は、年を明けると「寮問題」から大学改革の全面にわたる要求へとエスカレートし、ついには全共闘を名乗る学生集団の建物封鎖へと発展、やがてその波は衣笠キャンパスへも波及した。四月になると、電気工学科の大学院生から懇談会の申し入れがあつて、教員全員の出席が要請されたのであるが、日常的によく知っている学生であるために何の警戒心もなく応じることになっていった。しかし、話し合いが始まると、いつの間にか会場の周りは他学部を学生を含む集団に取り囲まれ、翌日早朝まで続く糾弾の場と変わっていった。彼らの要求は教室会議機能の停止であり教室会議体宣言への署名強要であった。当時、私は四月から学生部次長の役職についていたが、事態の深刻さを翌朝に知らされ、事態収拾に教室に貼り付くことになったのである。全共闘系の学生集団は一般学生も巻き込んで学科運営への学生参加のあり方を検討する会の要求が連日激しく行

われることになっていくのであるが、この交渉の窓口となられたのが、副主任であった松田教授であった。当時の様子は今でも鮮明に思い出される。先生が二階の会議室で昼食をとられてみると、決まって学生からの会議設定を要求する電話が掛かってくるのである。先生、悠揚迫らず弁当を使いながら、常変わらぬ口調で丁寧に対応されるのであるが、学生の無理な要求には決して応じようとはされなかった。ついにしびれを切らした学生十数名が、会議室へ押しかけて来るのであるが、結局、何ら言質をとることなく引き上げるのが常であった。

先生は誰に対しても対応が異なることはなかった。誠実なお人柄に接する場面は会議の席では何時も感じさせられた。二年程前、ある商社から私の所にホログラムに関する質問が寄せられたので、分りやすい解説書の有無について先生に電話でおたずねしたところ、わざわざBKCまで参考書をご持参いただいた。先生と二時間ほどお話しすることができたのであるが、先生のご在職中のことまで話がおよんで懐かしい一時を持たせて頂いた、それが先生にお会いした最後となった。先生、どうか安らかにねむりください。

辻村 寛（昭和二十八年卒）

母校立命館との出会いとその後

竹見 徳一郎

(昭和三十四年卒)

私が最初に立命館と出会ったのは昭和二十四年に立命館中学校に入学した事から始まります。

その当時は戦後間もない時で靴も十分な物がなくブタ革の軍隊用のもので手袋は軍手という姿で登校していましたが、何の恥ずかしさもなくまだましな方だと思っ

ていました。先生方も軍隊帰りの人がおられて、よく戦争の話が出ておりました。友達の中にも海外より引揚げて来た人がいる時代でありました。その中学校では部活動として野球部・水泳部・書道部に入り、水泳は京都工織大のプールに通い、いくつもの部活動を経験して何かを掴もうとしていた様な気がします。

私の家は京友禅を家業としており中学二年頃より家業の手伝いとともに染料合わせを習い始めておりましたが、世の中は不況になり高等学校は立命館を離れ公立学校に進学することになりました。自分の将来について家業を継ぐかどうかを考えると、その中で友禅業が難しくなれば電気屋をする

のが自分に適していると思ひ再度大学は立命の電気工学科に進学する事になりました。二回生までは比較的楽に思いましたが、専門科目の増えた三、四回生は内容を理解するのに大変苦労した思いがあります。

電気をより多く知りたいと思ひ、二回生の時に真空管式の五球スーパ受信機を手始めに製作して感動した記憶があります。三回生の時にはテレビジョン受信機の製作です。勿論、この当時は真空管式であり、今から思えば製作も修理もしやすい機器でありました。部品は京都駅近くの第一無線にたのみ三Q無線の部品を少しずつ取り寄せて、約半年ぐらいかけて十七インチのシャーシに十四インチのテレビを製作し箱も手作り、前のガラスもガラス屋に頼み見た目は不細工な代物でありましたが一様満足しておりました。この時日本のテレビ台数は十六万台であり、一インチ一円の時代に約四万円で作る事が出来ました。

大学時代は、理工学部比較的

近くに住んでおり家業の京友禅の手伝いをしながら出席を取る講義・実験は昼に行き取らない講義は夜に受講する生活をして、電気工学の取得に努力しておりました。

四回生の時、羽村先生から教室助手のお話しがあり決心しました。教室助手として社会に出る第一歩となり、一生の仕事として電気に関わる事となりました。教室助手としていろいろの実験に参与すると共に先生方より計測・電力・通信等の電気の基礎をご指導頂くと共に、学生の卒論の実験の手伝いしながら勉強させて頂きました。

この中で後の私の仕事に役立つ出会いは小原先生、辻村先生ご指導の卒論のシンチレーションカウンターの試作と小堀先生ご指導のアナログ計算機の試作がありました。講義の中で印象に残っているのは将来の技術として雨量の多い屋久島での発電、月で発電して電波で地球に送電する話し、今では太陽電池の技術として利用されている。コンピュータの二進数、壁掛テレビの話であるが今では液晶・プラズマテレビとして実用化されている。三十年も経てば夢の技術が実際に実用されている事に驚いています。

三十年代には江崎ダイオードが発想の転換により不純物濃度を上

げて発見された事、トンネル効果の話となり、トランジスタ・集積回路へと大きく発展した時期でありました。

立命館中学、大学、助手時代と九年間お世話になりましたが、ここで大阪府立の新設工業高等学校に赴任することになりました。赴任校では電気電子系の授業、実験実習を教える事になり、今まで培った知識を生かす仕事になりました。この頃は我が国が工業立国として力を入れており設備は大変立派で、その設備を使った実験実習を指導する事になり、その一つがアナログ計算機の実習で自動車の重さ、パネ定数の変化による振動解析、自動制御の伝達関数を使った解析等をしておりました。卒論で行っていたシンチレーションカウンターの試作が取り持つ縁で、放射線、放射能、生物に与える影響等の授業を行い、実習では真空蒸着をしたアルミにβ線の飽和後方散乱による厚み測定、一キュリーのコバルト六十の線源による非破壊検査等普通には経験できない実験実習を行っておりました。

電気電子系学科の基礎的な電気理論、電子回路、計測、電子機器、電力設備等の理論については変化しないが、特に情報技術関係の变化は大きくデカトロン、アナログ

計算機からマシン語の計算と変わり、新たにフォートラン、ベーシックの時代と変わり、ハードウェア、ソフトウェアの勉強に忙しい事になりましたが、一般にも理解しやすい物となり益々多くの人が使えるようなコンピュータになって来ました。

工業高等学校の三十年代は、五分休憩七時間授業をしておりましたが、その後ゆとり教育の名のもとで十分休憩六時間授業となり、内容も整理されて、情報技術の占める割合が増え中堅技術者の育成の上から手作業の減少は残念に思っています。現在、時間外での物作りに関心のあるのはロボットとソーラーカーです。

工業技術、情報技術の進歩はこの四十年間は大変なもので新たに導入されるものと廃れるものを見て来ましたが、これから先は倍のスピードで変化すると思っっています。工業学校を四校経験して校長で定年退職して、高校の時見た広隆寺の弥勒菩薩を等身大の三分の二で製作したり、今は陶芸と畑を趣味としています。

現在、同窓会事務局として、毎年二十数名程度の出席を得て同窓会を開催しております。

立命館大学から学んだもの

南原 英生

(昭和四十五年卒)

この度、思いがけず立命電友会会報への寄稿依頼を頂き、光栄に思うとともに学生時代を思い出しやすい機会が与えられたことに感謝いたします。立命館大学の思い出と立命館大学から学んだことを振り返り、その責任を果たさせていただきます。

私が入学した昭和四十一年は第一次ベビーブーム世代が大学入学を迎えた最初の年で、入学者が多く一クラス増の四クラス編成でした。入学後しばらくしてのことです。ある先輩に「君は大学の使命は何だと心得ているか」と問いかけられました。そんなことは考えられないことも無く、「はあ」と私。「大学は社会に対する批判層を作るためにある」と先輩。「そうなんですか」と私は意味もわからず答えました。これが入学して最初の衝撃であり、いろいろなことを考えるきっかけになった出来事でした。何のために大学で勉強するのか、大学で何を学ぶのか、どのように社会に貢献するのかを考えるような環境が立命館大学にはあったような気がします。

故郷を離れて初めての一人暮らし。食事は外食で最初は珍しかったものの、慣れてくると寂しさがこみ上げ、また、夜は空腹で苦しかったものでした。しかし、下宿の友人が応援団に加入し、その影響で同立戦の観戦に西京極球場に足を運んだり、丸山公園での前夜祭に参加したりと、応援歌や寮歌を声を限りに歌い、徐々に愛校心が芽生え大学生活も楽しくなってきました(最近、子守唄代わりに立命館大学の応援歌や寮歌を孫に歌ってやるとよく眠るのです。不思議です)。

もともと数学が好きで数学科への進学を望んでいたのに、「数学科は教師になるほかは就職がないよ」と担任の数学教師に言われて、教師嫌いであった私は、それではと不覚にも電気工学科へ進路変更してしまっただけの入学でした。ですから勉強の上では大変でした。その上、物理が苦手で一回生の電気工学概論など、高校と同じ内容で易しすぎるとの友人の感想をよそに難しくて本当に苦しみました。二回生では遊びすぎて取得単位が

少なく進級が心配されました。三回生では大学紛争の影響で後期の試験がすべてレポートに替わり、そのおかげで多くの単位を取得することができました。一方でレポートを作成するために大学に入学してからはじめて真剣に勉強し、その結果、少し電気工学が面白く感じたことを記憶しています。また、その当時大学紛争もあったことから、喫茶店や友人の下宿で大学紛争についてはもちろん、生き方について、将来について遅くまで熱き議論をしたものでした(やはり団塊の世代は熱いのです)。また、「君の生活態度はなっていない」と友人に叱られ、生活を大いに反省し、勉強にも目を向け始めた時期でもありました。友人数人と空いている教室を見つけて「Ferman of Electronic and Radio Engineering」を輪講し、ほとんど教わってばかりでしたが学問の面白さを実感させてもらったこともよい思い出です。四回生では卒業研究や電気工学実験が始まり楽しさと苦しさを味わいました。実験指導書もいまのように丁寧には書いていなくて、それまで教わったことを駆使し、チームで団結しなければデータが取れませんでした。よくできる人が多く、ひたすらグラフマンになってグラフを描き続けていたように思います。また、就職

時期が始まってからもみんなと同じように就職活動ができずやっとなら就職試験に失敗、思いがけず大学院進学を目指すことになりました。運よく合格しましたがその年の大学院入学生は二人で、二人だけで受ける講義も大変でした。いまでも「大学院を二番で卒業しました」と自慢(?)しています。卒業研究と大学院では苜屋研究室に所属し、研究の進め方や新しい分野に挑戦する姿勢を学びました。研究の面白さを経験したのもこの時期でした。

大学院修了後、これも思いがけず広島電機大学(当時)の電子工学科助手として就職、結局、嫌いな教師職に就いてしまいました。学生さんとの年齢もそれほど違わず、学生気分が抜けない助手生活で楽しくはありましたが、相変わらずあまり電子・電気工学という学問は得意ではありませんでした。これでいいのかと反省しながらも(その当時の学生さん、本当に申し訳ありません)、学生さんと一緒に論文を読み、実験をし、先輩や同僚に助けられて学びと研究を続けています。それでも、講義や学生実験で立命館時代に教わったそのままを学生に伝えている自分が発見し、立命館大学で学んだことが知らず知らず生きています。だと実感いたします。

十年程前に七〇年電気工学科卒業生が「ななまる電友会」を結成し二、三年に一度京都に集って交流の場をもっています。いろいろな理由で転職した人、脱サラで事業を起こした人、一つの会社を勤め上げもうすぐ定年という人、病気に苦しんでいる人、卒業後の様々な人生模様がそこにありました。そして、その一人ひとりの経験に教えられ、励まされています。

大学教師になって三十四年、いまは岡山理科大学の情報工学科に勤務していますが、最近、恩師の先生方の講義やお顔をよく思い出します。強烈な個性で講義をしてくださったように覚えています。翻って、いま私は学生を励まし、学生に感動を与える講義ができていだろうか、と自問しています。また、最近、「社会の要請に応えて」、「社会が要求する人物を育てる」という言葉をよく耳にします。が本当にそれだけでいいのだろうかとも思います。大学に入学した当時の先輩の言葉が思い出されます。いつも、これでもいいのだろうか、皆が向いているこの方向でいいのだろうかと疑問を持ち、考え、社会に働きかける、そのような場を提供できる大学でありたい、教師でありたい、そしてそのような学生を育てたいと願っています。

琵琶湖に抱かれて

—— 学生生活の回顧録 ——

山口 秀樹

(理工学部助手)

一九九六年四月一日、雪。私が立命館大学に入学したあの春は、桜ではなく雪が舞う日でした。当時の大学や駅周辺は今ほどにぎやかではなく、また携帯電話もようやく普及しつつある時代でしたので、初めての一人暮らし、多少不安のあるスタートであったことを覚えてます。あれから十年たった現在、私は幸いにも本学の助手として研究・教育に従事しております。このたびは学生時代を回顧する機会をいただきましたので、稚拙ながらお話をさせていただきます。

私は光工学科の一期生として立命館大学に入学しました。受験した当時、情報系の学科とどちらにしようか迷った末、新し物好きの性格が影響したのでしようか、一期生というフリーズにも惹かれ光工学科入学を決めました。もちろん理由はそれだけではありません。SRや光通信など最先端の光技術を研究できるように整備された施設やカリキュラムはとても魅力的に感じましたが、私の心を最も掴

んだ分野はこういったいわゆるハitekではなく、人間にとって身近にある光、視環境に関する研究についてでした。これが私と立命館大学との「第一」の出会いです。しかしいざ入学してみると視環境に関する授業は低回生ではあまり開講されておらず、なにか興味をそそられる事はないかと考えていた入学当初、ある団体に出会いました。「鳥人間コンテスト」幼いころから見ている番組に出場するためのチームがある。大学生活を二分する、私と立命館大学との「第二」の出会いでした。電気系の学科に在籍しながら、視環境の勉強がしたい。例句の果てには飛行機を作ってみよう。支離滅裂な考え方と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、どちらかひとつでも欠けていたら、まったく違う人生を送っているような気がします。

この第二の出会いのインパクトは強烈でした。九年間の学生生活のうちおよそ半分は飛行機製作に費やしてきたと思います。最初は

テレビで見えて知っているから、自分の手で何か作るのが好きだから、なんとなく面白そうだからと思いはじめたのですが、やればやるほど分らないことが増えていく。高校生までしていた受験勉強では感じるものがなかった、「知る」と「がこれほど好奇心を刺激するものなのだ。私が入会した当時はチームの黎明期であったこともあり、材料の選定、構造および外觀のデザインの問題は多岐にわたりました。これらの問題に對して手探りで解を与えていかなければならない。チームのコンセプトとしてデザインのオリジナリティを追求することを掲げていましたので、飛行機としての理想的な解が必ずしも当てはまるものでもありませんでした。問題解決のために来る日も来る日も夜中遅くまで、チームのみんなと会議をしていたことを思い出します。製作期日が近づくにつれ時には厳しい口調で論を戦わせることもありましたが、みんな学生時代の貴重な時間とアルバイトで稼いだお金を飛行機製作につぎ込んでいくわけですから真剣にならないはずがありません。そんな議論を通じて今のチームにとって必要で実現可能なコトは何か、また将来的に必要となってくる技術は何かを慎重に決めていく

作業者は、とても大変でしたが貴重な経験となりました。また実際に自分の手で飛行機を作り上げていくことも大きな財産です。CADの設計図上では一見合理的に配置されたパーツでも、実際に製作すると不具合が生じる。「そんな隙間に指は入らないぞ」といった具合ですね。モノづくりには実際に触れる感覚が如何に重要かを実感しました。こうした一連の経験を通じて、エンジニアリングに必要な問題解決能力とセンスを磨くことができたと思っています。

飛行機製作に没頭しているうちに、気付くと研究室配属の時期になっておりました。かねてから勉強したいと思っていた視環境に関する研究を行っている池田・篠田研究室に配属が決まりました。配属当時は博士後期課程まで進学するとは微塵も考えず、飛行機製作を通じて感じたモノづくりの楽しさも手伝い、将来は企業で実際の製品をつくる技術者になりたいと思っていました。しかしせっかくなにせよ視環境を勉強できる研究室に配属されたのだから、もう少し勉強しようと思えば博士前期課程に進学を決めました。なんとなく進学した前期課程一回生の秋、学生生活で二度目のディープインパクト。先生の勧めで参加した初の国際学会

発表。そこで活躍されている先生や先輩の姿を目の当たりにして、こんな世界があるのだと心を揺さぶられました……「究めたい」。視環境を勉強するのではなく研究するのだと。視環境の研究は人間が基本です。人間という巨大なブラックボックスを如何に紐解いていくか、そして人間の感覚を如何に定量的に扱えるかが研究の柱となります。無数に存在する変数を絞り込み客観的に計測し主観との対応を決定付ける。これには飛行機製作で得た問題解決能力と電気系学科で得た計器の知識が非常に役にたちました。異端な学生生活を送っていたのかもしれないが、私にとっては全て欠かすことのできないものでした。

現在の私がこれほど成長できたのは、鳥人間コンテストの開催される琵琶湖とそれを眼下に望む母校のおかげです。またなによりも九年間もの学生生活を支えてくれた両親のおかげです。最後に池田光男教授、篠田博之教授はじめご指導いただいた先生方、および共に切磋琢磨した仲間への感謝の意を表したいと思います。

発表。そこで活躍されている先生や先輩の姿を目の当たりにして、こんな世界があるのだと心を揺さぶられました……「究めたい」。視環境を勉強するのではなく研究するのだと。視環境の研究は人間が基本です。人間という巨大なブラックボックスを如何に紐解いていくか、そして人間の感覚を如何に定量的に扱えるかが研究の柱となります。無数に存在する変数を絞り込み客観的に計測し主観との対応を決定付ける。これには飛行機製作で得た問題解決能力と電気系学科で得た計器の知識が非常に役にたちました。異端な学生生活を送っていたのかもしれないが、私にとっては全て欠かすことのできないものでした。

二〇〇五(平成十七)年度 電子システム系卒業生進学・就職状況

二〇〇六年三月に卒業した院生、学部学生の進路・就職状況は別表の通りとなりました。

就職先としては、例年通り、家電を中心とする電気機器メーカー、自動車関連の機械メーカーが圧倒的に多い状況です。大学で学んだことに直結する分野であること、最終製品が身近にあり、イメージしやすいこと、テレビコマercialなどを通しての接触度が大きいこと、景気好転の牽引分野であることなどが理由として挙げられます。次に多いのは情報・システムの分野です。システムエンジニアリング、ソリューション、アウトソーシングというようなキーワードの下に、拡大している領域です。背景には、企業の分社化、労働の流動化などがあると思われます。

本年度の特徴として、就職内定の時期が前年よりも若干早まったことが挙げられます。景気の回復基調に伴う企業の旺盛な採用意欲が理由の一つでしょう。電気電子工学科、電子情報工学科を対象とする求人は、企業数にしてそれぞれ七〇〇社近くに上りました(前年度はそれぞれ六五〇社程度)。

いま一つの理由は、経団連の定めた「新規学卒者の採用選考に関する企業の倫理憲章」が二年目を迎え、定着してきたことにあります。前年度までは、採用選考がゴールデンウィーク直前あたりから始

められました。が、本年度は四月初からの実施となりました。理工系に関しては、倫理憲章はむしろ就職試験の時期を早める方向に作用したと言えます。就職試験への応募の仕方は、修士学生は学校推薦を利用して、学部学生は自由応募で、というのが大方の図式ですが、最近では、自由応募の割合が増える傾向にあります。就職活動においては、大勢の先輩方に変化が起きているようになっております。今後とも、なお一層、後輩へのご指導、ご支援を賜りますようお願いいたします。(就職委員 齊藤 茂)

I. 卒業生・進学者・就職者一覧

(2006年3月8日現在)

Table with 5 columns: 卒業生, 進学者, 就職者, 活動中. Rows include 大学院(電気), 大学院(光工学), 電気電子工学科, 電子情報工学科, and 合計.

II. 就職先一覧

(大学院・修了生の就職先も含む)(順不同敬称略)

Table with 2 columns: 業種, 企業名. Rows include 電気・電子機械, 電力, 自動車, 鉄鋼, 運輸・通信, 建設, 印刷, 情報・システム, and その他.

● 同窓会だより ●

第三十五回を迎えた
「チャージ会」



私達の同窓会チャージ会については、立命電友会会報第十九号において申し上げましたが、昭和二十五年立命館専門学校工学科電気科と昭和二十七年立命館大学理工学部電気工学科を卒業し、第二の青春を充電する意味でチャージ会と命名し、第一回を昭和六十三年三月二十六日に開催した。以降毎年春秋二回開催している。私達はすでに喜寿を迎えた者、迎えようとしている者であるが、孤独にならず、開かれた心、豊かな生き甲斐を求めて、お互い共通の認識を持ち、チャージ会には参加する事を楽しみにしている。また、社会に遅れる事の無いように昼は国宝史跡など文化芸術美術の鑑賞、ある時はお茶会に、ある時はお寺の住職の講話を聞き精進料理に舌づつみを打ち、少しでも仏教に出会えた事を嬉しく思っている。また木戸孝允の旧家を訪れ、桂小五郎が隠れ家とし、デートもしていた料亭「幾松」での宴。ノーベル賞受賞者田中耕一郎さんの資料のある島津製作所創業資料館を見学。第三十五回チャージ会は平成十七



第35回 (17.11.10) 京セラ前 (撮影：平野)

年十一月十日、病に倒れている数人を除いて十名の参加を得て、京セラ(株)の稲森前会長の経営哲学に耳を傾け、京セラフラインセラミック館、美術館を鑑賞、近くの城南宮に足を運び方除の神と源氏物語の曲水の宴で知られる庭園を散策し当時の面影を偲んだ。夕方からは恒例による宴、伏見の料亭清和荘で賑やかに歓談し心を十分に癒すことができた。私達チャージ会は『心のゆとりをもって今・現在を大切にゆくり生きるよう心がける』こととしている。せつかく延びた寿命、元気で明るく楽しく次回へ集まることを心待ちにしている。これからも立命館大学理工学部、立命電友会、チャージ会の益々の飛躍を願っている。

幹事 清水賢吉



第27回 (13.11.10) 源光庵 (今井)

大学の同窓会が三十五回も続いているのは、一つに発起人の一人である清水君がそのまま今日まで幹事を続けてくれている賜物である。清水君は京都市役所を定年後、某食品会社に入社し、今も数少ない現役の一人である。彼は史学に、特に京都の歴史には造詣が深く、又人脈も広く、去年で社寺・史跡など六十力以上の案内の労を重ねている。その内の一つは第二十七回(十三年秋)「悟りは丸窓、迷いは角窓」の鷹峯源光庵。最近の第三十三回(十六年秋)は『幾松』での宴。その写真の左席が清水賢吉君である。益々元気な彼に回を重ねる毎に感謝の気持ち

を深

め、この春の会を愉しみにしている。 小山仁平



第33回 (16.11.19) 幾松 (平野)



している方も居りますが、大方は退職され第二の人生を過ごしておりますので、この場所の設定は好評でした。万葉を偲ぶ静かなたらずまいの中での一時を時間が経つのも忘れて学生時代の昔話に花を咲かせ、酒を酌み交わし語りましました。翌八日はバスによる箱根観光とゴルフに分かれ、特に観光では快晴に恵まれて芦ノ湖、駒ヶ岳、大涌谷を経由し途中強風にみまわれましたが、素晴らしい富士山を眺め、印象深い同窓会となりました。今後の開催は我々の年齢も考慮し、二年ごとの開催とし、次回は名古屋地域、次々回は仙台地域とすることを決め、再会を誓って解散となりました。

飯野光彦

三十六年卒同窓会



平成十七年十一月七日(月)に

暫く振りに電気三十六年卒同窓会が神奈川県湯河原温泉の旅館(阿しか里)で十六名が北は宮城、南は高知から参加して開催されました。従来は理工学部が滋賀県草津市に移転した時期は草津での開催もありましたが、殆んどが京都市内のホテルでの開催でありました。今回は特に幹事の計らいで同窓生の現在居住する全体的中間地点である湯河原温泉での開催となり、ホテルとは違い数寄屋造りの純和風の宿でした。現役で仕事を

立命館大学三二電友会が
「第十九回同期会」を
開催しました

今年度は阪神淡路大震災から十年目になりますので神戸で開催することとなり、十月二十八日(金)六甲山ホテルに前田稔夫先生のご臨席をいただき、北は札幌から中宮正治さん、西は広島から大森貞則さんの参加を得て総勢二十八名が集い、今は亡き恩師や同僚のご冥福を祈り黙祷を捧げて盛大に開催し、一〇〇万ドルの夜景を背景に夜の耽るのも忘れて語り合いました。

阪神淡路大震災では大勢の仲間が被災し、また街は神戸を中心に壊滅的な打撃を受けましたが、今日ではすっかり復興していて将来に向けての新しい街づくりも着実に進んでいました。頼もしい限りです。

ところで、私達も古希を過ぎましたので奥方の同伴出席を呼びかけたところ、松田浩章・貴美子夫妻、小船明・明子夫妻(奥方体調不調で欠席)の二組から出席の申し出がありました。最終的には松田浩章・貴美子夫妻の一組に留まりました。次回は出来るだけ多くの参加をいただきたいものです。

総会に先立ち神戸ゴルフ倶楽部で有志十二名によるコンペを開催

しました。ご存知のことと思いますが、神戸ゴルフ倶楽部は英国人貿易商グループ氏によって一九〇三年に開発された日本で最初の由緒あるゴルフ場です。当日は快晴に恵まれ、秋晴れの中を海に向けて打ち下ろしていく豪快なコースには明日への活力を十分に感じ取ることができました。

翌二十九日(土)は布引ハーブ園の見学を弾ませていたところ、昨日の秋晴れとは打って変わって早朝より大雨となり深い霧が発生して視界がきかなくなりましたので、一旦解散してシャトルバス利用の有志十二名で実施しました。幸いなことにハーブ園に到着した頃から小雨となり、霧も少しずつ晴れて参加者はハーブの緑と高貴な香りに浸ることができました。また昼食後はハーブ園内の森のホールで、ウイーンの森アンサンブル・新大阪バロックオーケストラの奏でるコンサートに耳を傾け堪能しました。

終了後は、「お互いに健康で次回もお会いしましょう」と申し合わせ、三々五々帰路につきました。なお、欠席者の中には体調不調の方が見受けられます。どうぞ健康に留意され、次回は是非参加して下さい。お待ちしております。

松井新三



懇親会の一齣



32電友会 総会出席者



神戸ゴルフ倶楽部でコンペ



布引ハーブ園 見学者一行

立電四一会

(昭和四十一年卒)

同窓会は二〇〇五年十一月二十

日(日)に四条河原町の料亭「田ごと」で開催された。例年紅葉鮮やかな時期に集まっており、今回は繁華街の中にあるが閑静な京料理店で行った。浦山先生と前田先生と菊屋先生を囲んで、同窓十六名が集い懐かしく語りあった。先生からは最近の母校の発展拡大状況や現在の学生気質等の有意義なお話を戴いた。また、私たち同窓生は遠路広島、姫路、徳島、奈良、神戸、大阪、京都と駆けつけてくれた旧友を交えて、卒業後の人生遍路や近況(仕事、健康、趣味、年金等々)や学生生活の思い出に花を咲かせた。同窓生は六十二歳を超え、人生の節目を迎えているが全員元気に仕事にボランティアにと活躍されている様子がうかがえた。今回も会が盛り上って三時間では短く思えた。終わりに全員で記念写真を撮り、再会を誓い閉会した。

今回参加の同窓生は中西恒彦、久米貴夫、佐野進、石原邦夫、片岡正範、木下貴友、山下正之、佐藤勲、三輪洋敏、坂井清、谷岡欣照、勝部一郎、三宅宏幸、八石絃一郎、辰巳武夫、福田陽一(敬称

略)の十六名であった。最後に、毎回幹事役の福田氏並びに、世話役の方々に感謝申し上げます。 三輪洋敏



辻村・前田研、浦山研 合同同窓会開催期日 変更について

前回(二〇〇四年十二月四日)の同窓会の席上で次回の開催期日を二〇〇六年六月三日(第一土曜日)とすることを申し合わせましたが、諸般の事情で二〇〇六年十二月二日(第一土曜日)に変更することとなりました。同窓の皆様方には大変ご迷惑をかけることとなりますが何卒宜しくお願い申し上げます。

卒研代表 藤井力広 加藤義彦

学系便り

平成十八年度の

電子システム系の主な役割

電気電子工学科

学科長 中西 恒彦

就職委員 沼居 貴陽

電子光情報工学科

学科長 齊藤 茂

就職委員 浮田 宏生

電子情報デザイン学科

学科長 山内 寛紀

就職委員 寺井 秀一

【新任】

道関 隆国

平成十八年四月一日、電子情報デザイン学科教授に着任。

西門 秀人

平成十八年四月一日、電気電子工学科任期制講師に着任。

「住所変更」掲載の

一時中止について

会長 荒木 徹

予てより、事務局あてにご通知をいただきました連絡先変更の情報は、会報の「住所変更」の欄を通して逐次会員皆様方にご紹介してまいりました。その主旨は、立命電友会が「年次同窓会の活動と会員の相互交流」を根幹としており、それらを唯一の目的とした名簿整理とその広報は極めて重要で必要不可欠な事柄であるとの認識に基づいております。しかし昨年四月より個人情報保護法が施行され、本会会員情報につきましても法に触れないようにならざるを得ない状況となり、これまで以上に慎重に取扱わなければならないとなりました。その詳細につきましては今後役員会において、法の遵守と同窓会活動を両立できるように議論を積み重ねてゆく所存であります。つきましては、これらの検討を行なう期間、暫定緊急措置として「住所変更」の会報への掲載を一時中止させていただきます。うまく返事が返せないのが心苦しいのですが、大変嬉しく思っています。毎回のお願いですが、皆様の積極的なご寄稿を賜りますようお願い致します。なお住所変更の葉書を同封してありますので、変更のあった方はご連絡宜しくお願い致します。

簿整理とその広報は極めて重要で必要不可欠な事柄であるとの認識に基づいております。しかし昨年四月より個人情報保護法が施行され、本会会員情報につきましても法に触れないようにならざるを得ない状況となり、これまで以上に慎重に取扱わなければならないとなりました。その詳細につきましては今後役員会において、法の遵守と同窓会活動を両立できるように議論を積み重ねてゆく所存であります。つきましては、これらの検討を行なう期間、暫定緊急措置として「住所変更」の会報への掲載を一時中止させていただきます。うまく返事が返せないのが心苦しいのですが、大変嬉しく思っています。毎回のお願いですが、皆様の積極的なご寄稿を賜りますようお願い致します。なお住所変更の葉書を同封してありますので、変更のあった方はご連絡宜しくお願い致します。

事務局便り

立命電友会会報二十七号の発行にあたり、ご寄稿いただきました皆様方には、心より御礼申し上げます。最近、季節の挨拶や日頃の出来事等をメールにていろいろご連絡をいただくことが多くなりました。うまく返事が返せないのが心苦しいのですが、大変嬉しく思っています。毎回のお願いですが、皆様の積極的なご寄稿を賜りますようお願い致します。なお住所変更の葉書を同封してありますので、変更のあった方はご連絡宜しくお願い致します。

立命電友会連絡先 千五二五-八五七七 滋賀県草津市野路東一- 立命館大学理工学部電子システム系内 立命電友会事務局 川畑 良尚 宮林(月・木) 電話 〇七七(五六)二六六二 FAX 〇七七(五六)二六六三 E-mail: denyuukai@ml.ritsumei.ac.jp http://www.ritsumei.ac.jp/se/re/denyukai/ (会報の題字は久保之俊氏)

計報

一九九一年に退職されました岡田武夫先生が、平成十八年一月二十八日に永眠されました。ご冥福をお祈りします。

Table with 2 columns: 卒年 (Year of Graduation) and 氏名 (Name). Entries include 昭26年 鷲野谷員一 (平成17年10月1日), 昭28年 張 年錫 (平成17年6月23日), 昭29年 齋川 謙三 (平成17年10月1日), 昭31年 近藤 巖 (平成17年7月16日), 昭32年 吉川 岩男 (平成17年8月6日).